
東方最強伝説

ザナドゥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方最強伝説

【Nコード】

N9367V

【作者名】

ザナドゥ

【あらすじ】

冷静沈着が座右の銘の俺、神^{じん}和輝^{かずき}
東方で色々と暴れたいと思います。

あいつ等いつたい何だったんだ…（前書き）

処女（童貞？）作品になります。

楽しんでいただければいいなと思っています。

ゆっくりしていいからね！！

あいつ等いつたい何だったんだ…

「じゃーな。」

「また来年。」

「おーう。じゃねー。」

友人二人と別れ、家に入る俺こと神^{じん}和輝^{かずき}18歳、男 高校3年生も最後 大学入学を待つだけになっている。

彼女？フツ、リア充爆発しろ！とだけ伝えておこつ。

二次元を愛してやまない訳では無いが、それなりに好きで色々とかじっている程度の人間だ。

特に気に入っているのが、東方Projectなる同人PCゲーム四季映姫・ヤマザナドゥだったり、古明地さとりだったり、キスメやらヤマメやらがお気に入りである。

理由はまず、可愛い。次に、可愛い。最後に、タイプだから。

ロリから始まる変態に支配されている、下半身のセンサーに引かれたキャラ達である。

シューターとしては下の下。easyですら、コンテニューを十回以上使わないとクリアできない。

「はぁ。何食うかな。」

親は、親父一人。母親は俺が生まれてすぐに蒸発してしまったようで、ロシア以外の地球の何処かに生存しているらしい。

納得はしていないが、確かめられないから仕方ない。死ぬまでに会えると嬉しいが。

ちなみに、親父は仕事の都合で余り家に居ない。さらに、日本にいないこともしばしばだ。

つまり、ほぼ一人暮らし、飯も自分で作らなければならない。

「メンDOIしなあ。食へに行くかな。」

ちよっと遠いけど、駅前の牛丼チェーン店にでも行くかな。

チャリあるし。

くく青年移動中くく

「ん？」

なんだ、あいつら？

廃ビルの入り口の所に、黒スーツにサングラス＋黒いバンが数台、ザ・マフィアって感じの奴等が十数人いる。

弾けんばかりのバディ共々皆、同じ格好だからかなり怖い。

余りジロジロ見てると、からまれそうで恐いので、颯爽と駆け抜けよう。

「私は、風邪になる！！」

あ、声に出ちゃった……次、気を付けよう。

くく青年帰宅中くく

お、黒集団がいなくなってる。

余り時間たつてないんだがな。

何してたんだろ、気になるなあ。

中を覗いてみようと、入り口を目指してハンドルをきる。

前にさしかかった瞬間、轟音、閃光、熱波、衝撃……………

視界真っ白。ひたすらに真っ白。

熱は、なんかもう心地よく感じる。

死の感覚はこんな感じなんだなあ、と考えていると。

「もし。もし。」

声が聞こえる気がする。

《気のせいだ。なんたって俺は爆発に巻き込まれたんだからな。そうだ、幻聴だ。》

「和輝、和輝、おい和輝。」

《幻聴に名前を連呼されてる。返事してみるか？》

「そうだけど。誰かいるのか？」

「はあ、やっと返事が返ってきた。」

声と共に現れたのは、知らない人（女性）。

ロングの黒髪がいい感じ。ポニーテールにして欲しい。

「え？誰？」

「こんな、異質空間で最初に聞くことがそれ？もつとあるでしょ。

此処は何処？私は誰？みたいなのだ。」

目の前で、どっかの劇団員みたいな動きをしながら話しかけてくる人（女性）。

「え、あ、じゃあ、何処？此処。そして、あんた誰？」

「はあ、まあいつか。初めから期待なんてしてないからさ。無駄に冷静じゃないの。聞いてた通りだねえ。」

「質問に答えて欲しいんだけど。それと、聞いてたって誰に？」

「ああ、悪いね。私は、アズ。厳密には違うけど神だよ。んで、此処は、」

「ちよっと待て。」

「何さ。」

「神つつたか？今。」

「うん。」

「え？笑うところ？」

「笑える冗談は言っていないだけだね。」

「本当かよ。にしては、フランク過ぎない？威厳とか出さないの？」

「めんどくさいじゃん。威厳とか。」

「はあ、続けてくれ。」

「はいよ。此処は、あの世とこの世の間だね。」

「三途の川みたいな感じか？川っぽく無いけどな此処。つか俺死んだんだな。」

「そりや三途の川とは違うからね。後、和輝はまだ、死んでない。」

「は？死んでないってどうゆうことだよ？爆発に飲まれたはずなんだけど…」

「三つめの質問に被るけどね。あんたの、母親に頼まれてさ。助け出した感じ？」

「俺に聞くなよ…。つか、俺の母さんと知り合い？」

「そうだねえ。人間界に降りたときに助けてもらったっけ。」

「神が人に助けられてんじゃねえよ。」

「仕方ないでしょ。初めての人間界だったんだからさ。」

「で、俺との繋がりは？」

「御礼に何でも願いを叶えてあげるって言ったらさ、息子が死にそうになったらどんな方法でもいいから助けてって。」

「顔の知らぬ母さん、ありがとう。俺は今軽く泣きそうです。」

「んで、俺を助ける方法って？さすがにあの爆発の中、無事は無いだろうけどよ。」

「うん、そのことなんだけどね。転生って知ってる？」

「転生？輪廻のあれ？」

「知識としては、正しいと思うけど、今回は違うんだ。」

「生まれ変わらないのか？俺。」

「今回はね。此処が三途の川じゃないのがポイントだね。」
「じゃあ、どういう？」
「君の好きな世界に転生させてあげようじゃないかってね。」
「好きな…。世界って？」
「君が生きてきた所も世界だけど、アニメ・ゲーム・映画・小説
ts いろんな世界があるね。」
「ほう。」
「希望はあるかな？」
「何でもいいんだよね？」
「そうだよ。」
「だったら、ゲーム系から東方Projectが良い。」
「わかったよ。ん、同人ゲームか。」
「ん？なんか問題でも発生したのか？」
「問題発生というより、特典付きみたいな感じかな。」
「どういうこと？」
姿勢を正すアズ。俺も釣られてきおつけのポーズ。
「オホン、いくつか希望が叶えられます。」
「おお！マジか！！」
「やっと、テンション変わったねー。」
「冷静沈着を心掛けてんだよ。」
「で、希望は？」
「そうだな。能力持ちがいいな。」
「まあ、東方だしね。他には？」
アズは東方を知っているらしい。
「妖怪になってみたい。」
「できるよ。希望は？」
「できるんだ、日本にいる動物なら何でも良い。」
「わかった。」
「後は、身体能力をトップにして欲しい。」
「身体能力ね。体力とか瞬発力とかだね。」

「妖力もだ。」

「他にはある?」

「アズと通信出来るようにしてくれば、もうOKだ。」

「うんうん、わかったよ。じゃあ、転生させるね。」

「わかった。」

「おまけとして、記憶も全部引き継ぐからね。」

「了解、ありがとうな。」

「じゃ、がんばって!!」

この声が聞こえた瞬間には、視界がホワイトアウトしていた。

あいつ等いったい何だったんだ…（後書き）

いかがでしたか？

ご意見、感想お待ちしています。

強力な力は制御できないと毒のようなものに成り下がるようだ（前書き）

二話目です。

・テンションが高い・シーンの切り替えが唐突、とご指摘を受けました。

そのご指摘を意識しつつ、書きました。

どうでしょう？

後書きにキャラ設定を追加しました。

感想お待ちしております。

強力な力は制御できないと毒のようなものに成り下がるようだ

真つ白だった不思議空間から、フェードインして来たのは、一面緑の平野。遠くに森が見える。

アズは本当に、神だったんだなあ。などと思っていると。

《和輝、聞こえる？》

と、何処からともなくアズの声が聞こえてきた。聞こえたと表すよりは、頭に響いてきたという表現の方が正しいだろうか。

「聞こえるぞ？」

《声に出さなくても考えるだけでいいよ？他から見ると不審者だし。》

《そうか、便利だなこれ。》

《念話みたいな物だけど、考えていることが全部筒抜けだけどね。》

《その部分は不便だな。》

《まあ、仕方ないってことで。体はどう？》

《はあ、まあいいや。かなり調子がいいな。力がみなぎるとは、まさにこの事だ。》

《身体能力も格段にアップしてるから、試してみてね。》

《ん、わかった。でもな》

《でも、何？》

《体が毛だらけなんだが、尻尾2本有るし。それに視線が低い。しかも四つ足だ。》

《まあね。妖怪だし。猫又にしてみました。》

《猫か……。良いな。人型になれるか？》

《なれるけど、今は無理だと思う。》

《なぜ？妖力使えば変化出来るんじゃないのか？》

《術、使えないでしょ？》

《……………。》

其処から逃げるように走りだす。《あ、逃げた。》と聞こえた気が

するが、気のせいだろう。

一步、二歩と踏み出すたびに、地面が爆ぜる。

黒ずくめ集団の時より風になっている。詳しくは判らないが、へたな車よりは何倍も速い。四つ足だからだろうか。

走っていると、目の前に森が見えてきた。

いけるか？そのままジャンプを決行。見た感じは、あまり広くは無さそうだ。

遂行直後に、景色が吹き飛んだ。

「っ！！」

びびった、だっていきなりスカイダイビングをしたときの時のような、光景が広がるんだもの。尻尾ビンビンになっちゃったよ。

飛翔速度はかなり速かった。全力を振り絞ったからかな、ちよつとしたワープだった。てか、まだ上昇してんだけど。

ここでふと、そうふと考えてしまった。これ着地どうしよう、と。

そう考えたら毛が逆立ってきた。ゾクゾクしてきた。

《ハイハイ、ここで一つ妖力の使い方をおしえるよ。》

「ナイスタイミング！アズ頼む！自由落下になる前に早く！！」

思わず声に出して叫んでしまう。それだけ焦っているのだ。

《まず一つ、落ち着いて。二つ目に体内にある、妖力を感じて。落ち着けば簡単にできるよ。》

深呼吸二つで平常心。コレが俺の常用スキル。

「っふう。よし、力を感じるかぁ。力ねえ。」

《空中で落下中なのに良くそんなに落ち着けるね。くつろぐってレベルだよ、それ。》

《現状を言っな。無理やり無視してんだから。これは色々と便利だからさ。使えて損は無いんだよ。つか、力を感じろってどうやるんだよ？》下から風を感じるが、無視だ。無視。

《意識を体内に向けてみたら良いんじゃないかな？》

体内に意識をか、地味に難しいこと言うな。と文句言っても始まらない、腹に意識を向けてみる。

「コレかな？」

向けてすぐに分かった。イメージ的には白い塊が腹の底にある感じ。《分かったみたいだね。それを、体外に放出して、固めて。足場にするイメージをしっかりね。》

目を閉じ、足元に楕円形の板をイメージして妖力を放出。背中の肩甲骨の辺りから何かが出て行くのがわかった。

次の瞬間に足に硬質な物を感じ目を開けると、白く発光した物が出現しその上に乗っていた。

《出来たみたいだね。》

《ああ、良かった良かった。》

木が普通に一本一本見える。真剣にホツとした。転生してすぐに、輪廻の輪に組み込まれるところだった。

その後、この板を何個も何個も創って地面まで降りる。体力は余り使っていない筈だが無性に疲れた。

妖力を消費したせいだろうか。いや、精神的なものだな。

《……なあ、アズ。》

《どうしたの？》

《……俺、人化の前に飛行を覚えるよ。》

《あ、あはは……、頑張つて……。》

俺の表情（猫だから表れるているかは、分からないが）を見て（何処に居るかは知らないが）、アズの声は同情の色が強く出ていた。はあ、先が思いやられる。

強力な力は制御できないと毒のようなものに成り下がるようだ（後書き）

どうでしたか？

実を言うと主人公の能力が決まってません。

それなのに、スペルカードの案ばかりが浮かんできます。

……………どうしましょ。

ちなみに、主人公の容姿（猫）設定は

色 毛 茶

目 灰

体重 8？

身長 縦 15？

横 40？

尻尾は20？先端から3？ほど、白色になっている。
って感じです。

ちなみにアズは、

外見20代前半

色 毛 黒

目 黒

体重 ひ・み・つ

身長 154？

くつきりとした目 ロングヘア

元気を表したような性格。

あまり女言葉を使わず、少年のような言葉を使う。

和輝にアドバイスをだしていて、ナビゲーターのポジションになっている。

アラズエル・ミティンが本名。

となっています。

略称っていうか、あだ名っていいですね。

和輝、覚醒と経験と自覚（前書き）

今回は初の試みをしています。

感想をください。

和輝、覚醒と経験と自覚

あの決意の時から二年。俺は飛行が出来るようになっていた。

飛び方にも色々とあるらしく、その身一つで飛べるもの、元からある羽を使って飛ぶ者、擬似的な羽などを顕現して飛ぶ者。おおまかに分けるとこの三つだそうだ。

最初のタイプがほとんどで、大妖怪や霊夢、PA(ry:咲夜さん等が挙げられる。次のタイプは、種族的なもので鴉天狗が最もポピュラーだろう。

俺は、一番最後タイプだった。チルノと同じなのだが、？と同じなのは何か泣けてくるものがある。

形状的には、蝙蝠の翼と蝶の羽を混ぜた感じだ。肩甲骨の内側から一対のエネルギーが放出され形作られている。端から粒子状になり散っていくがその後、根元に戻ってくる。つまりは、エコロジード。

この翼は初め白色だったが、訓練を重ねていると色を変える事が可能になり、今は黒にしている。これを皮切りに妖力の色を変えられるようになった。

そしてその色に属性を付けることも出来るようになった。たとえば、赤が炎、青が水や氷、黄色が電気などだ。

様々な妖術は覚えたが、人化の術はまだ覚えていない。理由は、妖怪やら妖獣に襲われていた為に時間が無かったからだ。

熊や蜘蛛、植物系にも襲われていた。

ふむ、初めて襲われた時の話をしようか。

そのときは決意をしてから一年目。まだまともに飛行も出来ない時だ。

襲われた時には死ぬかと思った。死ぬしかない。

相手は蜘蛛、黄色をベースにした毒々しいカラーリング。

下半身が蜘蛛で上半身が人間だった。角が生えていることから、鬼蜘蛛だったのだろう。拳は木を砕き、脚は地にめり込む。糸で行動範囲を狭めてくる。体が小さい猫で助かった。

妖術はまだ隠密系を数個しか覚えていない。攻撃は妖力強化した爪で引っかくか、体当り。

力はあるため威力はあったが、攻撃範囲が狭く短い。

甲殻が非常に堅く、致命傷は与えられなかった。

傷を付ける事はできるが、すぐに塞がってしまう。

妖力で攻撃できないかと色々試しもしたが、精々が強風を起こす程度。

仕方なく属性付加した妖力板で防御して時間を稼いでいたんだ。しかしこのままではジリ貧になるのは目に見えている。

そんな時に能力が覚醒したんだ。ふっと。頭というより心に。響くというより染み渡るように。

『ありとあらゆるものを真似する程度の能力』

そうだ、これが俺の能力だ。そうか、俺の能力はこれだったのか。元から認知していたと感じてしまいそうな違和感の無さ。

基本的な使い方とも理解した。心が、頭が、体が、能力が教えてくれる。

心曰く。冷静であれ、過去を混ぜ返すな。我を抑えろ。

頭曰く。覚え理解しろ、記憶だけが設計図、イメージだけが材料だ。我を駆使せよ。

体曰く。身構えることなかれ、軽やかに柔軟であれ。我に力を持たせるな。

能力曰く。無から有、有から無はありえない。対象を選び、我を解放せよ。

ここからは一方的な戦い……にはならなかった、しかし余裕をもって戦えていただろう。

初めに真似をしたのは姿、力は此方が勝っていたため、あとはリーチだけからだ。

妖力板を相手の目の前で壊し、その妖力で強風を巻き起こし隙を作る。

対象は妖力、練り上げ強度を増し身体に巻きつけていくイメージを浮べる。

能力の解放は良く分からなかったが、意識をする事で発動に成功した。

全身から妖力が噴出したから成功だろう。

回復した鬼蜘蛛は突然の妖力の放出に驚愕の表情を浮かべ、警戒のためか攻撃を止め距離をとった。

一方俺は魔法少女のごとく光るリボン（妖力の帯）に包まれ、ものの数秒で変身完了。色は赤をベースに黒の縞を入れてみた。

相手と瓜二つな姿になった俺。体格を真似ただけなのでさらに能力を使用し体重も真似をする。

俺の本体は中心にコアの如く丸まっているが、しつかり周囲を視認することが出来ている。うむ、便利だ。

そして、目の前で俺が変化し、己と同じ姿（色違い）になったのを見て衝撃をうけたのか、呆けていた鬼蜘蛛に、俺はリーチの延びた腕で攻撃を仕掛ける。

右で一撃、左で一撃。最強ランクの筋力で放たれる二撃に、蜘蛛の体は耐えられなかったようだ。

緑色の気色悪い粘液を甲殻とともに撒き散らしながら脚の二本が爆散した。

こんなにグロ注意な光景が目の前に展開するとは思っていなかった俺は、思わず吐きそうになってしまい結果としては怯んでしまった。

この隙が悪かったのだろう。

痛みの為か、気合いの為か絶叫のような雄叫びをあげ、殴りかかってくる蜘蛛。

動きの止まった俺はろくな防御もせずに、右肩に拳をモロに喰らってしまった。

脚が地面に陥没する程の体重を乗せて、腕力だけで木を容易く砕く筋力を持つ拳を受けたのだ。

もげる事は無かったが、右腕は直ぐには使えないと理解してもなお、余りあるほどの衝撃と激しい鈍痛だった。

「っあ！視覚だけじゃ無くて痛覚もリンクしてんのかよー！」

エヴァかよ！何号機だー！！

この能力は全感覚をフィルター無しに、俺に伝えてくれるらしい。

改善策は今後考えるとしてだ、今は蜘蛛を倒さなければ。

蜘蛛は糸を俺に飛ばしてくる、がんじがらめにされてしまいそうだ。

妖力板（赤）に属性付加で顕現させる。

糸は板に衝突したが薄く煙をあげるだけで、火がつかない。火耐性が高く今の火力ではどうしようも無いようだ。

そこで一つのアイディアが浮かんだ。それは妖力板の応用で、刀を造り出すということ。

成功すれば攻撃のバリエーションがかなり広がる。

薄く強靱な板を顕現。

外側から分解していき刃は、長さ1メートル、幅45センチ、厚さ一ミリ。

日本刀より洋刀に近い。せいりゅうえんげつとう青竜偃月刀に似ているだろう。

それを左に装備。手のフィット感は素晴らしいが、利き腕とは逆なためとてもしつくりと来ない。まあ、仕方無いだろう。

（まったく、早く諦めて帰ってくれよ。）等と思いつつ、偃月刀を右肩の後ろに隠すように構え、板を右側から回り込んで斬りかかる。

蜘蛛は飛び出してくるのは予想通りだったのか、慌てもせずに殴り付けてくる。

しかし、それは俺にとっては有利な流れに違いない。

突き出した左腕の肘から先を振り上げた偃月刀で切り捨てる。かなり鋭利な仕上がりのおうだ、名刀いっても遜色がなさそうな切れ味を誇っている。

腕の断面がはつきりと見える。吐き気を通り越して泣きそうだ。

しかしここで止まったら先ほどの二の舞になってしまったため、動き続ける。

先ほど振り上げた腕を垂直に落とし、左肩から先を切り落とす。

二分割した腕が地面に落ちるドチャツという生々しい音が響くより早く、45度右上に切り上げ胴を逆袈裟に斬り上げる。

捻る力に逆らわず、ジャンプし回転。首に狙いを定める。

蜘蛛は痛みのためか、白目を剥きすでに意識は無いであろうと容易に想像がつく。そのまま全体重を乗せた斬撃を首に叩きつける。

首骨、鎖骨を断ち切る硬質で嫌な感触を残し、首から右脇腹にかけてを切り落とした。

俺は斬った姿勢のまま停止し、蜘蛛が動かないのを感じてから変化と妖力刀を解いた。

蜘蛛は生々しい音と共に地に伏し、これが死なのかと思い、自分の生を感じたとたん涙が止めどなく溢れてきた。

自分は弱い、肉体ではなく心が、それに考えも甘い。妖怪としての生き方を理解した気がする。

周囲に残るのは戦いの跡、それと蜘蛛の死体。

誰にも聴かれることは無い。俺は久しぶりに声を出して泣いた。それはもう大声で。

浮かれていた自分の情けなさ、相手の鬼蜘蛛に対する罪悪感、その他もろもろ含めて泣いた。

明日は今日より、来週は今週より、来年は今年よりも強くなろうとどこか冷静な自分が考えていた。

アズは声をかけてはこなかった。今はそのやさしさありがたい。

思い切り泣こう、明日のために。

和輝、覚醒と経験と自覚（後書き）

いかがでしたか。

読みやすかったら、私の試みは成功です。

感想は回復魔法、登録は支援パフになります。

これからもお願いします。

近況確認&フラグ（前書き）

はい四話目です。

今回は短めにしました。

では、どうぞ。

近況確認&フラグ

この世界に猫又として生まれはや50年、人化の術も覚え、妖術もそれなりの数を覚えた。

今なら、最初に戦った鬼蜘蛛を相手に能力を使わずに戦う位なら出来そう。

インファイトは苦手と自覚した俺は、生成した槍を飛ばして攻撃するようにしている。

ロングヌス（ATに弾かれる）やらゲイボルク（十発八中）やら机を変化させたような巨大な針（某対有機生命体ヒューマノイドインターフェース作）等の模造品を妖力で大量生産 飛ばす 撃退 or 討伐、という流れがこのところのファイトスタイルだ

そして防御が堅固になった。妖力板を動かせるようになったのだ。それはもう自由自在に。

複数枚でも動かせるが、数が1つ増えるごとに難易度が急上昇する。自在に動かせる最高枚数は七枚。一時間もすると、気絶するほど疲れてしまうのだが。

基本的には戦闘中に二枚、特訓中は十枚活用している。

戦闘関連はこれくらいにして、現状をお知らせしよう。

現在俺は旅をしている。

目的は、神様に会って仲良くなること。

何故かって？東方の世界だぞ。神様に会える世界だ。会いたいだろ。そして会えたら仲良くなりたいたろ。

とまあ、それだけの理由だ。

まだ幻想卿は無いみたいだし、特にやることがない。というのもあったりするが。

どこの神社にも一応神様は居るようで、今のところ会えなかった所は無かった。

まあ、必ず仲良くなれるとは限らないが。

現在は20程の神社に訪れ、15の神と仲良くなった。しかし、信仰がうすく妖精よりは強い程度がほとんどだった。

皆、最初は俺が妖怪だからかなり警戒してくるが、酒を渡して礼儀をしっかりとってあげれば、中々に良い奴じゃないか！と認めてくれるのだ。

神様に会いに行く手順としては、村に入る 近くにある神社を聞いて回る 正当な方法で金稼ぎ 酒を買って持って行く。この他にその神の好みが聞けたらそれも追加する感じだ。

金はパワーアップした俺の能力で稼いでいる。

初めは俺の体だけが発動可能だったこの能力だが、今は石等の無生

物や木等の植物にも発動出来るようになったのだ。

その能力で木や石を變形（＋妖力強化）させて置物を造っている。

注文も受け付けており、一日で完成する上に丈夫とかなり好評である。

三日も売り歩けば噂が広がり客が集まってくる。

数え切れない（数えていないが正しい）が10日ぶりの町、川に近いが山の中。神社はあるのだろうか。

村長宅に訪れてご挨拶、妖術の多重使用で完璧に人間仕様だ。宿にして良いと家を紹介していただいた。

聞き込みを（ついでに商売を）開始して数分、かなり有名な名前が出てきて内心吃驚仰天。

さて、今回の神様は崇^{ターゲット}り神らしい。容姿は巨大力エルだそうだ。

分かる人はもうお分かりになったかと思うが、その神様の名前は諏訪子。洩矢諏訪子だ。

神力が強く、毎年生け贄（なんと人間らしい）を一人差し出す代わりに、畑作&稲作を豊作にしてくれるとか。

物騒だがこの時代にはよくあることなんだろう、不承不承といった感じだが皆が納得していた。豊作で村が生き残るほうが重要なのだらう。

好みを聞いて回るも収穫は無く、流石に人間は拐いたくは無いので酒を持っていく事になった。

戦いにならなければ良いが、なかなか過激な神のようだ。時代的には未来の出来事だが、加奈子と戦うくらいなのだから難しいだろう。

はぁ、どうなることやら。

近況確認&フラグ（後書き）

いかがでしたか？

感想がなくて悲しいです。

内容に希望があればコメください。

盛り込んでいきます。

なにが言いたいかというと、感想をください。

猫又とミシャゲジの対面（前書き）

今回はそれなりに長めです。

上手く書けてるかなあ……………。

それでは、どうぞ。

猫又とミシャゲジの対面

さあ、やって来まいりました諏訪大社。

生け贄があるからか参拝客はいないが、念のために人間スタイルで訪れた。

賽銭箱は無いが本殿の前で二礼二拍一礼、神様が相手だ無礼はしたくない。

健康祈願（妖怪でもごく稀に体調を崩すのだ）、旅程安全を願いつつ、周囲の気配を探る。

やはりというべきか、強い神力が辺りを漂っている。今までの神様とは比べ物にならないほど強い。

しかし、肝心の本体の気配を掴めない。辺りの神力が強すぎて探りづらいのだろうか。

「ん？」

神力を搔き分けて気配が近づいてくる。何だろうか、妖怪にしてはとても堂々としているし、人間は祭りの時しか来ないと聞いた、それに神にしては気配が弱すぎる。俺のように旅のついでに來ている者だろうか。

雑念を持ちながら熱心に御祈りをし終え振り返る、ソコには幼女が腰に手をあてて仁王立ちしていた。

真ん丸の目が特徴的な帽子を被り、威風堂々を現したような表情で此方を睨み付ける様に見える。

「お前、人間じゃないな。」

「何ですか突然、ああ私は和揮。神 和揮です。」

「私は諏訪子だ。知ってるだろうけど此処の神をやってるよ。」

「聞いていた姿と違いますが…。」

「どんな風に聞いていたかは知らないけど、それは私が神力で見せているの幻覚だよ。」

「成る程それですか。あ、コレをどうぞ。お酒です、他に貴女の好みが無かったものだから。」

「ああ、ありがとう。で？あんたは何者だい？私が此処まで解らない奴に会うのは、初めてだよ。まるで、霧がかかっているみたいだ。」

「はい、今術を解きますね。」

そう言うと、俺は術を解除し猫の姿に戻る。

「ほう、猫又か、妖力はそれなりにあるようだが、用が無い訳じゃ無いよね？」

「はい、猫又の和輝です。今私は全国の神社を巡ってまして。」

「妖怪の癖にかい？」

「はい、やっぱり変ですかね？」

「まあねえ、欲に逆らわないのが普通の妖怪だしね。で、目的は？」

「仲良くなろうと。」

「はあっ！？」

「いえ、仲良くなって回ってるんですよ。さすがに貴女ほど強い神は、初めてですが。」

「……ふざけてるか？君は私をおちよくってるのかな？」

あれえー？

もしかしなくても怒ってらっしゃる？このリアクションは予想してなかった。

呆れられるとは思ってたけど……。

「そ、そんなことはな「黙れー！」「」

聞く耳見も取り付く島も無かった。

神力が溢れ出し諏訪子の金色の髪を、生きているかのように暴れさせてる。

「長いこと神をやってきたけど、ここまで虚仮こけにされたのは初めて

だよ。どれ、ミシャグジの力を見せてやろう。お代はそうだね、お前の命を頂戴するでしょう。」

やばいやばいどうしよう！

諏訪子様はかなりご立腹でいらっしゃる！

戦うしかないのか？どうするよ俺！

そうこうしているうちに、諏訪子が地面から飛び出してきた巨大なおたまじゃくしの様な生物を数匹けしかけてきた。

ミシャグジと呼んでいたが、召喚獣だろうか、三匹が滑空するように近づいてくる。鋭い牙が無数に生えていて噛みつかれたらそこで対象の生命が潰えるだろう。そうだろう。この場合は俺だったので、文字通り他人事じゃない。

俺は人型（耳と尻尾付き）になり、妖力板を五枚生成、青竜偃月刀を顕現し両手で装備し迎え撃つ。

妖力を体に纏い、刀に色と属性を通しながらミシャグジを斬りつける。

色は黄色、属性は雷。スパークする高速の斬撃、影を残し実像と分離した斬撃は先走り、死すら焼き切る一迅になる。

ジャギヤリッ！！

なん…だと…？雷の属性を帯びた偃月刀で皮膚を切り裂けなかったのか！？ミシャグジは吹き飛んだが、手応え的に致命傷では無いだ

ろう。雷が効いていて欲しいところだ。

ってヤベエ！他にも要るんだった！

今まさに俺の胴体を噛み砕こうとしていたミシャグジ二匹を、妖力板を動かし殴り飛ばすようにして距離を取る。

「くっ、硬てえ……。」

「ふん、雷はまだしも剣なんてちやちな武器は効かないよ！」

先ほどの三匹の他にも二匹のミシャグジが召喚されていた。

計五匹、いつの間に戻ってきたのかプスプスと黒煙をあげてる奴が先程切り飛ばしたミシャグジだろう、全部黒一色だから焦げているか解らないうえに、姿形がまったく一緒なので見分けがつかない。

皮膚が硬くて斬撃が通らない、打撃武器は使ったことが殆ど無い。

奥の手が無いわけでは無い。無いのだが……完成していないのだ。

光速の斬撃を超える真空の刺突、雷の刃を超える風の槍。

イメージ的には（衝撃波の上位種である）真空波の一点特化板だ。（出し方はアズに教わった。）

偃月刀を分解し再構築、エストック（レイピアよりも突きに特化した剣、錐の様な刃をしている。）を両手に装備し構える。

右足を下げ半身になり、左手の甲を外側にするように顎に添える、

右手は軽く肘を曲げいつでも動かせるように腹の辺りで待機。妖力板は背後に配置して、死角をカバーする。

エストックの刀身に妖力を染み渡らせる。色は透明、属性は風。尖端を指すように、渦巻く風を発生させる。俺の足元にも右回りの風を生み出し、睨み付け威嚇する。

構え（武器込み）や雰囲気の変化をみて警戒したのか、先程のように突撃はしてこない。

距離は五メートルも無いだろう。

奴等は安全圏だと思っっているようだが、残念ながら射程範囲内だ。

左腕を捻りを加えて付き出す、風は先端より細く鋭く大気を抉りながら飛翔する。

真ん中にいるミシャグジの口を指し、透明な槍が高速で疾走する。

ミシャグジは反応出来ていない、その時にゴウッ！と爆発音が響きわたった。集中を切らしたために、圧縮していた空気を逃がしてしまったようだ。

辺りを風が蹂躪する。俺は右腕で目を守って耐えるが、ミシャグジ達は後方に弾き飛ばされ、眺めていた諏訪子にも影響を与える。立っていらなくなったのか、しゃがみこむ様にして耐えていた。

そこで突然、フォーカスがかかったようにニヤリと方頬をつり上げるように笑った諏訪子の顔が見えた。

「っ！」

瞬間、視界が広がったように辺りが視えた。

「！？」

五匹いたミシャグジがないのだ、煙の様に消えてしまったかのよう
うに。

「なかなか出来るみたいだけど、これで終わりだよ。死になー！」

諏訪子は地に当てていた軽いジャンプと共に、両掌を天に向けるよ
うに振り上げる。

するとどうしたとか、地面というよりも大地が轟音をあげてこち
らに向かって飛んで来るではないか。

「え、は？ちよっ！！くっ……………ふう、
『のつりよくかいほう能力解放 げんしんうつむじや現象模写』
！！」

飛んできた地面は半径二メートル強、厚さは一番分厚い所で三メー
トルはありそうだ。

エストックを足元の地面に刺し範囲指定、妖力を流し込むと全力ダ
ッシュで前方へと移動する。後ろに全速前進しないのはある懸念が
あるからだ。

俺が指定した範囲外に出た直後に轟音をあげ浮上する大地。

「はあっ！？」

案の定動きが止まる諏訪子、万歳の格好で顔は驚愕に染まっている、音無き声を出すように口をパクパクさせているのがよく見える。

しかし、このままだと相殺した岩の破片に当たってしまうだろう。これが俺の懸念の正体だ。

命を狙ってきた相手にする心配か、と言われたら返す言葉も無い。

しかし俺の目的はあくまでも仲良くなること。相手を怪我させたくは無いのだ。

それに、道場破りならぬ神社破りをする気はさらさら無い。……無
いっただら無い！

背後で重量を感じさせる轟音が響いた、空中で地層どうしが衝突したのだろう。

間に合えと念じ足に力をこめる。

間に合わなかったら、俺だけではなく諏訪子にも被害が出るだろう。

と、諏訪湖に50センチ程の岩が迫っているのが見えた。

「くそっ！」

このままじゃ間に合わねえ！！

俺は手に持っているエストックをみて閃いた。

先程のように風を爆発させて、加速すれば間に合うのでは無いだろうか。しかし土壇場で試したところで成功率は低いだろう。急加速に俺の身体も耐えられないかもしれない。だが……これしか無いが……。

尻尾をからめるようにエストックを持ち、妖力を流し込んでから地面に叩き付ける。

直後には剣が歪に歪み、爆発しようとしはじめる。

俺は出来る限り硬い妖力板を10枚形成し重ね、それに飛び乗る。

瞬間、激しい破砕の衝撃と共に急発進する板（+俺）、妖力板の欠片を次々にばら撒きながら、諏訪子との距離をグングン縮める。

諏訪子の周りをグルリと回るようにして、なるべく衝撃を逃がすように回収する。必然的にお姫様抱っこになってしまったが、後で謝ろう。

まずは此处から離れなければ。

「あ、あんた……。」

「おや、どうしましたか？」

「あんたは、本当に何者なんだ？」

「最初に言っただけではありませんか。ただの神様と仲良くなって回っている妖獣、猫又の和揮ですよ。」

「そうかい、さっきは私を馬鹿にしているんだと思っていたけど、あんたは真剣なんだね。」

「ええ、勿論ですよ。信じて頂けましたか？」

「ああ信じるさ、信じるしか無いじゃないか。それにしても、変な妖怪だね。あんたはさ。」

「ふふ、では改めて私とお友達になってくださいますか？」

「なってやろうとも。あんたといれば退屈しなくてすみそっだ。」

余談だが、諏訪子が神社に泊めてやると言ってきた。

暫くは此処に滞在することになりそうだ。

猫又とミシャゲジの対面（後書き）

はい、という訳で5話でした。

どうでした？下手ですねえ。

能力に関しては、『中二病っぼく』をいしきしました。

二回目の戦闘描写ですが、慣れません。

脳内描写はかなり妄想力のバックアップのおかげで、3D映画のように鮮明に浮かんでくるのですが……。

コメントお待ちしております。

誰か、私に指導を。欠点をあげつらうだけでも良いのです!!

ロリコンと子供好きは似て非なるものと感じるのは何故だろうか？（前書き）

サブタイトルはもはや私の疑問になっています。

ロリコンのザナドゥです。

高校3年生という、学校的な都合で更新がずいぶん遅れてしまいました。

すみません。

それでは六話目どうぞ。

ロリコンと子供好きは似て非なるものと感じるのは何故だろう？

諏訪子様と和解して、泊まりに来ないか？と誘われた俺は二つの返事で快諾。

俺はいったん村に戻り、村長にすぐに出立する旨を伝えた。

当然訝しがられたが、用件は予定よりも早く終わったそして前の村に用事を忘れてきたと、嘘を言い少ない荷物を抱え村を出た。

嘘は万能だ、人を傷つけることも出来る。他人を友人に変えられる。その逆もまた然り。『嘘も方便』とはよく言ったものだ……。などと無駄に哲学じみた事を、歩きながらつらつらと考えていると、アズの声が響いた。

なに格好つけようとしてるの？私、前にも言ったと思うけど『（かつこ）』に囲われてなくても、聞こえてるよ？

おおアズ！なんか久しいな。それにそんなメタな事言わんでも良い。

思考が筒抜けなのには、慣れてきたがなんか恥ずかしい。

昨日も一昨日も話したでしょうに。

それはそうなんだが、戦いが激しかったからな。感覚的にさ。

そ？実際はそんなに長くなかったよ。

そうか？4日は戦ってたかと思ったけどな。

それはいくらなんでも長くない？

ま、少し誇張すぎたかとは思うが訂正はしない。

そう。まあそれは置いて、これからどうするの？

まずは諏訪大社に戻って厄介になろう。せつかく泊まってけと誘ってくれるんだから。

そう伝えるやすぐさま羽を生やし空へ向かう。（人間スタイルの場合は鴉のような羽だった。色は黒にしている。鴉だしな。）

妖術を使い下からは鳥にしか見えないようにしている。このまま神社に向かい人が居ないことを確認し境内に着地。

社の中に入ると諏訪子が迎えてくれた。

「やあ、予想外に早かったが用事とやらはもう良いの？」

「ええ。用事と言っても麓の村に荷物をとりに良く程度なので、洩矢様が気をおかけになる程ではありませんよ。」

「苗字なんて余所余所しい、諏訪子でいいよ。」

「では、諏訪子様が気をおかけになる程ではありませんよ。」

「まだ他人行儀だねえ。タメ口でも良いのに。」

はあ。と腰に手を当てつつ、ヤレヤレといった風にため息をつく諏訪子様。

「や、それは追々という事で。いきなりはハードルが高いですよ。」

「はあどるってなんだ？」

しまった、横文字を使ってしまった。米国との繋がりが無いこの時代で伝わる訳が無い。

「あ、いえ。気にしないで下さい。妄言です。」

「そう言われると逆に気になるが、まあいいか。」

「そうして下さい。」

「うーん、少しは砕けてきたかなでもまだ硬いね。やり辛いならあたし、『お兄ちゃん』って呼んであげようか？」

「いえ、それは。いや、でも、うーん。」

どうする、いや本音としてはお兄ちゃんと呼んで欲しい。しかし口リコンと思われないだろうか？

これはまずい、真剣にどう答えたらいいか解らない。こんな難題は初めてだ。

「おーい、ちょっとー？あれー、『冗談のつもりだったんだけど？おーい！？』」

たしかに俺は巨乳よりは貧乳が好みだ。それだけでもロリコンなのだろうか？

「あれ？なんか目が据わってきたよ？おーい！」

「ああ、いえ。お気にならず。少し熟考してただけなので。」

「え、、、少し？」

「はい、すみません。えと、諏訪子様が私を『お兄ちゃん』と呼ぶ件ですが。」

「いやだから、冗談だつて！！」

「……………え？」

「冗談だよ冗談。」

「あ……………ゑ？」

「いや、態度が固いからさ？解そうと思ってね。」

「……………。……………荷物、置かせてもらっても良いですか。」

「あ、うん。案内するよ。（何だろ、この罪悪感。）」

俺はそのままフラフラとした足取りのまま部屋に案内される。

ねえ和輝、そんなに『お兄ちゃん』って呼ばれたかったの？

ん、まあなんて言うか。憧れかな。

憧れ？

そ、憧れ。他人からしたらくだらないかもしれないけどさ。

和輝ってさ……………、ロリコン？

「っ！ゴホッゴホゴホゴホ！」

「ちょっと！？大丈夫？いきなりどうしたの！？」

「ゴホッ！い、いえ。気にしないで下さい。大丈夫ですから。」

「そ、そう？なら良いけど。」

アズー！

なあによう。

お前……………何で……………ロリコンで……………よりもよって。

だってさ、見た目幼女に『お兄ちゃん』って呼ばせようとしてたじゃん。ロリコンじゃ無かったら変態だよ？

いや、俺も男だからある程度は変態でいいけどさあ。ロリコンは無い。

諦めがいいね。そういえば憧れだとか言ってたね。どういうことなの？

……………教えてほしい？

気にならないと言えば嘘になるねえ。

そうか。話は単純で短いんだが。この世界に来るまえn（ry

「この部屋だよ。」

「ありがとうございます。」　続きは後でな。

わかったよ。

「では、荷物を置かせていただきますね。」

俺は背負っていた物を畳の上に置いて、直後に人化を解いた。

突然ボウンス！と煙を出しながら猫になった俺に吃驚したのか、諏訪子が「うわっと！」という声を上げていた。

「いきなり変身しないでくれよ。」

「にゃー。」

申し訳なさそうに耳をたたみながら一鳴き。

「その状態の和輝は可愛いね。ちょっと抱かせてよ。」

にゃう、と鳴いて足元に擦り寄る。

「フサフサでサラサラな毛並みだねえ。和む……。」

耳の後ろや顎の下などのツボを的確に搔いてくれる。俺も和む……。

引っくり返ったり擦りついたりしながらにやうにやうにやーにやー言っている。

「和輝、さつきから『にやー』しか言っただけで、その状態だと喋れないのかい？」

一旦座り諏訪子を見上げて言う。

「そんなにやことはありませんが、喋りづらいのです。」

人形態を生活の主軸にしてから喋りにくくなってしまったのだ。鳴き声に近い発音のものが特に苦手になってしまった。

「……可愛い。可愛いよあんた!!」

諏訪子ガバツと俺に抱きついてきた。

「うにゃっ!!」

「当分この姿でいてよ!そして一緒に寝ておくれ!!」

「わか、わかりました!わかいまひたから、はなひてくりやさい!くりゅ、くりゅひい……。」

「ああ!ごめんよ!大丈夫?」

「ごほっ、ごふっ。え、ええ大丈夫です。おきになやさらず。」

俺らしくも無く取り乱してしまった。何故か少し恥ずかしい。少し嬉しかったのは俺だけの秘密だ。

よっ！このロリコンめ！！

俺はロリコンでは無い！断じて違う！！

アズには筒抜けなのを忘れていた……。

ったく。

………違っよな？

ロリコンと子供好きは似て非なるものと感じるのは何故だろうか？（後書き）

はい、どうでしたか？

久しぶりに書いてみると指が動きにくいですね。

そろそろ大学も決まる予定なので、次のテストまでに五つほど投稿できたらいいなあ。などと薄らぼんやり考えています。

早く幻想卿入りしたいですし。

構想だけは生殺しのようなものですから。

では、感想&ご指摘のコメントお待ちしております。

飛来せし鉄の輪（前書き）

今回のサブタイトルは和輝視点でのとある一ページです。

まあ、内容を御覧して頂ければお分かりになるかと。

ではでは、七話目。どうぞ。

飛来せし鉄の輪

諏訪子の家（神社）に泊まり始めて、一週間が経過した。

この一週間は兎に角濃かった。

諏訪湖に愛でられ、諏訪湖と一緒に寝て、諏訪湖と遊んで、諏訪湖に風呂へ連行された。

実は俺、あまり風呂が好きじゃないのだ。

猫になってから、深さのある水溜まりに恐怖に似た感情を覚えるのだ。人型ならば幾分かマシなのだが…。

旅の身と言うこともあって普段は濡らした布で体を拭いている、しかしこの諏訪大社しつかりと風呂が有った。

さすが神社と感心するより先に、湯を張った浴槽に投げ込まれた俺。

ソコから20分程の記憶が無くなっていて、気付いた時は、案内された部屋の隅っこに居た。

後で会った諏訪湖に泣きそうな表情で謝られたため、随分と取り乱してしまっただようだ。

慰めつつ弁明して、機嫌を直すのは至難の技だったが、その分だけ心が近づいたようで、互いにフランクな会話が少し出来るようになった。

さて、突然だが俺は今日諏訪大社を出で旅に戻ることにした。

元より長くは滞在する気では無かったのだ。

「それでは諏訪子様。今までお世話になりました。」

人型をとり荷物を背負った俺は、鳥居の前でお辞儀と共に礼を言う。

「本当に行ってしまうのかい？もう少し留まっても良いじゃんか。」

諏訪子は眉を八の字に曲げ、寂しそうに提案してきた。

「そんな顔しないで下さいよ。お互い長命の身、また会えましょう。」

「そうか、そうだね。また泊まりに来てくれ。歓迎するよ。」

「有難うございます、それでは。」

鳥居を潜り立ち去ろうとしていた俺の背に諏訪子が声をかけた。

「和揮！」

「はい、何ですか？」

「こんな時にこんなことを言うのは何だけど、1つ相談に乗って
はくれないか？」

とても真剣な表情を見た俺は諏訪子の前に戻り言った。

「ええ、勿論ですとも。正答では無いかも知れませんが、私に出来る限り知恵を搾りましょう。」

と、言う目に見えてホツとする諏訪子。

「そうか、ありがとう。」

「そして、相談とは？」

諏訪子は「妖怪の和揮に聞くのは変かも知れないけどさ……。」と、前置きをしてから言った。

「最近、信仰が減っているんだ。問題は今のところコレといって無いんだが、今の内に解決しておきたくてね。稲作・畑作の豊穰もしているし、願いも叶えている。何が問題なのだろうか。」

「ふむ、信仰が………それならば生け贄を変えてみてはいかがでしょう。」

「生け贄？」

「はい、生け贄です。人間が同じ人間を捧げる。精神的にキツいものがありますから。」

「そういうものかねえ。」

「理解し難いですか？」

「まあねえ、価値観の違いって奴かな。でも仲間を失う悲しさは理解できないは無い。」

「そうでしょう？それを毎年行っているのです。かなり厳しいものがあるではないでしょうか。」

「あゝじゃあどうすれば良いって言うの。無くすって言うのは無理だからね。」

「生け贄を無くすのではなく、その他のもの。例えば家畜や酒、その年に取れた作物の何割かを納めさせるんですよ。そうすれば、仲間も捧げなくて良くなり、なおかつ豊穰も受ける事が出来るようになりますから、信仰も戻ると思いますよ。」

俺の提案を咀嚼するように、小さく頷きながら聞いていた諏訪子は、
「……成る程、それは良い案だね。よし、それでやってみるよ。和揮は頭が良いな、相談してよかったよ。ありがとう。」と、納得してくれたようだ。

「いえ、一寸した発想の転換ですよ。」

と言い、ああ。と思い出したことについて質問した。

「諏訪子様は土を操れるんですね？」

「ん？そうだよ。まあ、厳密には土地を操るではなくて大地を味方につける、が正しいけど。」

「ならば、1つの種類の土だけを動かすことは出来るのですか？」

「一つだけねえ、出来なくはないな。それがどうしたって言うんだい？」

「前に洞窟で寝た事がありまして、その時に奥からとても硬い石の様なものを見付けまして。コレがその石です。」

諏訪子に鞆から出した石を渡す。

「ほう、コレは固いね。しかし……うん、操れるよ。」

「ならよかった、私はソレを鉄と呼んでいます。」

「鉄か、何かしっくりとくる呼び名だね。」

「本題は此所からなのですが、地面から鉄だけを出すことは出来ますか？」

「……よし、やってみよう。」

一瞬考えたあと、行動に移す諏訪子。

地に両掌をつけ、目を閉じて集中をする諏訪子。

なにかブツブツと独り言の様に呟いている。

その時だ、地面が大きく揺れ動いたのは。

すると、諏訪子の後ろの地面が割れ始めた。

思わず感嘆の声をあげている俺を尻目に地面からは鉄の山がせり上がってくる。

山の成長が止まったのは、俺の身長を少し超えた当たり、だいたい二メートル程だろうか。

「どうだい、コレだろう？」

「ええ、そうです。ではソレを使って攻撃して欲しいんですが。」

「攻撃？何でさ。」

「私の能力は『真似』ですから。せつかなので覚えてから行こうかと。」

「攻撃って言ってもね、どんな攻撃だい？」

「それは諏訪子様が決めてください。使用者は貴女です。一番しくりくる形にしてください。」

「うーん、わかったよ。でも、少し時間をおくれ。」

「ええ、良いですよ。」　そう言うと、すぐに技の開発に没頭する諏訪子。

鉄をグニグニ変形しているのが見えたため、取りあえずはソレを真似して時間を潰すことにした。

コツを掴み始めた辺り　　時間にとすると十五分程だろうか。
に諏訪子の新技が完成した。

「良いかい、コレは真正正銘の新技。威力も範囲も把握しきれないからね。気を付けな。」

「はい、お願いします。」

俺は妖力板を複数展開し、それ全てに進行形で妖力を流し込み強化しつつ、いざとなったら地面を隆起させようとエストックを地面に刺し答える。

「いくよ！」

足の裏を地面に叩き付けるようにして踏み込み、勢いよく空に飛翔した。

すると、地中から輪を模した鉄が何十と吐き出され諏訪子に追従する。

そして、全てが停止した瞬間に叫ぶ。

「『諏訪子 鉄の輪』……！」

諏訪子の両腕を突き出す動きに連動したように、鉄の輪は俺に殺到してくる。

俺は妖力板を向かわせて対応しようとするが、接触した瞬間に碎かれてしまう。

《あゝ、コレは不味いんじゃない？》

《解ってるよ！》

俺は地面に刺していたエストックの石附を踏み、能力を解放するた

めにキーワードを叫ぶ。

「『のうりよくかいほう能力解放きおくもしや記憶模写』！」

すると、エストックは砕け散り、溶ける様に地に滲みこんだ。

数瞬後、地震と見紛うほどの揺れと共に鉄の山が生みだされていく。

きちんと妖力を通して強化した特別品だ。

不安を押し殺しつつ山の陰に隠れる俺は、無駄と知りつつも妖力板をドーム状に生み出しておく。

4〜5秒後、鉄の輪が殺到して来た。激しい金属音と轟音の中で俺に出来た事は、鉄の山を妖力で強化することだけだった。

いつのまにか辺りは静寂に包まれていた。

気づいた時にはすべてが息を潜めていた、すべてが死んでしまったかの様な静けさ。

この中で俺はへたりこんでいる。辺りを見渡す気も起きず、ただ地

面を眺め己が鼓動に耳を傾けていた。

心臓は動いている、しかし生きているのが信じられない。血の流れを感じる、それすら他人のもののようなようだ。

思考は続くが要領を得ないものばかり。

どれほどの時間を無駄にしたのか、一秒かもしれないが一年と言われても信じてしまいそうな時の流れ。

身動き一つ無く最低限の呼吸を繰り返す俺を外界からの軽い衝撃が意識を現実^{がいかい}に釣り上げた。

「ちょっと！！大丈夫かい！？」

「……………諏訪子……………さま？俺は……………生きて……………？」

「当たり前じゃないか！！土煙が晴れたらへたりこんでいたんだ。私がどれほど心配したと思ってるの。」

「……………俺は、どれ位の間こうしていました？」

「え？ほんの二分程だと思うけど……………」

「……………少しばかり、休ませて頂いても宜しいですか？」

「そうだね、それが良い。荷物は任せて、さあ部屋に行こう。」

諏訪子は猫に戻った俺を抱えて部屋に向かい歩き出すと同時に、ミシャクジを二匹召喚して荷物を運ばせる。

ここで意識は俺の手から零れ落ちた。

意識を取り戻すまで後、 8 4 時間 3 6 分 5 6 秒

飛来せし鉄の輪（後書き）

いかがでしたか？

自分的には『着々とレベルアップしてはいるがまだまだ下手』という感じです。

ご感想&ご指摘お願いします。

シリ阿斯（笑）（前書き）

八話目です。

かなり間があいたので、文が拙くなっておりますがご了承ください。
だんだんと成長しますので…。

シリ阿斯（笑）

夢を見た。こっちに来る前の私生活の夢。

友人二人と遊ぶ他愛も無い夢、しかし他愛も無いからこそ温かい夢。

東方の世界に来て50年。あっちの事は忘れたと思っていた、忘れようとしてきた。

ホームシックとは違うが、皆の顔を見たくなってしまう、声を聞きたくなってしまうからだ。

今の夢でまた思い出してしまった。

幼馴染は男で彼女なんて羨ましいものも居ない、くそったれな日常だった。くそったれな温かい環境だった。

「和輝、どうしたんだい？涙なんか流して。悲しい夢でも観たのかい？」

そんな声で覚醒した俺は自分が泣いていた事を知った。

「いえ、悲しい事では無く昔の温かな夢を観ていました。」

「それは詳しく聞いても良い話かな。」

「止めて下さい。振り返ることしか出来ない話です、戻れないだからこそ温かくそして辛い話なんです。」

そう、もう戻れない過去の話。もう思い出さないと思っていた。

「そうか……、なら聞かないよ。でも涙は隠すな、堪えると余計に辛い。」

「はい……。ありが…とう………ございま…す……っ。」

静かにさめざめと泣いて半日を過ごした。

ご飯を食べながら諏訪子に謝る。

「すみませんでした。」

「なに、気にするな。悩みの一つや二つ誰にでもあるぞ。」

「そう言ってもらえると助かります。」

これは本心だ。あまり思い出たくは無い。もう会えないのは分かっているから。

「ところで私はどれ位寝ていたんですか？」

「3日と半日位だね。」

「…そんなに。」

「心配したんだから、怪我は無かったから死にはしないとは思っていたけど。」

「すみませんでした。あの時の事はあまり覚えていませんが、直撃はしていなかったと思います。」

「そのようだね。しかしあの技があんなに強力だとはね。和輝の隠れていた鉄の山なんて最後には崩れ落ちてたよ。ギリギリだったね。」

「そうですか……それは危なかったです。しかし裏を返せばそれほどの技を真似できるようになったということですね。」

「本当に真似は出来るのかい？」

「ええ、試してみましよう。多少は私用に変えますが。」

「じゃあ、外に行こうか。」

所を変えて外。『諏訪子 鉄の輪』を初めて発動させた場所だ。傷跡などは修復を終えたそうでもいつもどおりの厳かさを醸し出している。

「じゃあ、的でも用意しようか。」

少し離れた所から諏訪子はそう言うと、十数個の人型の的を出現させてくれた。

「ありがとうございます。では、いきますよ。」

背に翼を出現させ、手には剣を一つ。両手で扱うような大剣と呼ばれそうな物を装備。

能力のキーを叫びつつ剣を大上段から地面に振り下ろし、その勢いのまま一回転して飛翔。

叩き付けた剣はすでに砕け地面に染み込んでおり、俺を追い駆けるように鉄の輪が多量に吐き出される。

俺は鉄の輪に追いつかれたところで止まり、右腕を天に突き上げ技名を叫ぶ。

「『コピーバレット【諏訪子 鉄の輪】』!!」

翼をはためかせ、掲げた腕を振り下ろし標的に向ける。

すると俺の背後に待機していた輪が、的の在る辺りに疾走する。直後、土煙がたつと共に轟音と的を砕く破碎音が響く。

着地すると、タタタと諏訪子が隣に駆け寄ってきて一緒に砂煙が晴れるのを待つ。

もうもうと立ち込めていた砂煙が晴れると、そこは見るも無残な地面があった。

的は後も形も無く、ズタズタにされている地面しかなかった。

「へえ、完璧に真似できてるね。」

「こ、こんなに威力があつたんですか……。」

なんで俺は生き残れたんだろう……。

「和輝？ 膝が笑ってるよ？」

「な、何言っひえるんれすか。大丈夫れすよ。」

「いや、そんな蒼い顔で言われても。呂律も回ってないし。」

こほっ、と一つ咳をして誤魔化しつつ深呼吸をし気持ちを整える。

「ま、まあこれで完璧に真似できていると解ったので、良しということ。」

「まあ、和輝が良いなら良いけど。で、和輝はどうするの？」

「そうですねえ。ぶっ倒れて予定が狂ってしまいました。が、予定通りに出発しようかと。」

「そうかい、寂しくなるね。」

「本当は3日前に出る筈だったんですけどね。」

「ほとんど寝てたけどね。アレで滞在してたと言っのかい？」

「ははは、手厳しいですね。」

へらへらと笑いあいながら交わす言葉。

二人ともふざけているわけでは無い。むしろ自分を誤魔化していた。

金輪際の別れではないが、初めての別れ。寂しくない訳が無い。

泣きたくない、涙を見せたくない。泣くのは別れてからだ、見せたら別れるのが余計に辛くなるから。

「では、そろそろ行きますよ。」

「ああ、また来るんだろ？」

「ええ、直ぐには無いですがね。寄らせて頂きますよ。えーと荷物。」

「持ってこさせてあるよ。」

諏訪子の後ろには俺の荷物を頭に載せたミシャクジが二匹控えていた。

「ありがとうございます。では行ってきます。」

さよならとは言わない。また帰って来るといふ意味での『行ってきます。』だ。

その意図を汲んでくれたのか、諏訪子は微笑みを浮かべてこう言った。

「行ってらっしゃい。」

~~~~~  
~~~~~

諏訪大社を發つてから六ヶ月たった。

結局、諏訪の大戦には参加しなかった。諏訪子は負けてしまったらしい。

（悪いことをしただろうか……。）と一人考えるが、コレでよかったのだ。と結論をつけた。

最大の理由は、東方の歴史にあまり関わりたくなかったからだ。

幻想卿に入ったらガンガン絡んでいきたいが、今干涉して後に後悔はしたくない。

今、係わったせいで幻想卿の歴史が変わりましたでは洒落しゃれにもならない。

そうならない為にも、追い込まない限りはなるべくかわらないようにしているのだ。

さて、次はどこに行くの。

後数百年たてば妹紅が誕生するだろうが。

ひとまずは、諏訪大社に戻って加奈子にでも会うことにしよう。

それから今まで通り日本中にいる神様、八百万の神々に会い顔見知りにあわよくば友になりに行こうと、俺は今まで通りのしかし新しい目的を心に刻み込み、未来へ一歩を踏み出した。

シリアス（笑）（後書き）

はい、いかがでしたか？

出だしがなんかチョットだけシリアス（笑）でした。

特に伏線というわけでは無いですが、もしかしたらもしかするかもです。

感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9367v/>

東方最強伝説

2011年12月21日20時49分発行